

# 新型コロナウイルス大規模クラスターを経験して

施設名:いなほ会 信成苑

発表者:前田 朝秀(看護主任)

金城 健作(課長)

## 【はじめに】

令和4年7月、当事業所において新型コロナウイルスの大規模クラスターが発生し災害級の打撃を受けた。その発生から収束までの過程を今後の糧にするため報告する。

## 【目的】

コロナ大規模クラスターの状況と収束までの過程を振り返ることにより、再び陽性者が発生した場合の迅速な対応方法並びに感染拡大を最小限に抑える対策を検討する。

## 【方法】

感染症委員会を中心に職員間で振り返りを行い、どのような対策が必要であったか、今後の業務に生かせること等を検討した。

## 【期間】

令和4年7月13日～8月15日  
(陽性者発生から収束まで)

## 【経過】

- ・7月13日 職員1名、コロナ陽性者発生
- ・7月14日 利用者1名陽性、上記とは別のフロアで別経路から発生
- ・7月15日 利用者6名、職員1名が陽性
- ・7月16日 利用者1名陽性  
スクリーニング検査の実施 利用者、職員  
合計90名
- ・7月17日 利用者8名、職員3名陽性
- ・以降連日4～5名の陽性者が発生し続けた。  
また、利用者に動きのあるフロアの感染急拡大が進み、37名中、35名が感染した。

## 【結果と考察】

利用者94名中54名、職員58名中24名、合計78名が感染した大規模クラスターは、収束まで約1ヶ月を要した。想像以上の感染力に、利用者

のみならず職員にも感染者が多数出たことは大きな教訓となった。

また、沖縄県をはじめ関係機関の支援があることで、必要物品の準備や報告連携方法等の対策を知ることができた。

コロナのリスク対策は、基本的な対策に加え様々な対応が必要であり、常に変化していく状況に臨機応変、かつ迅速に対応する必要性があること、管理者、現場、総務課等チームで役割分担し、力を合わせて冷静に対応しなければならないことが分かった。今後の対策として上がった主な事を下記に記す。

- ・平時の基本的な感染対策の徹底
- ・コロナ陽性者が出た場合の初動対応の重要性
- ・職員の感染症に対する知識、技術の向上
- ・BCPの重要性(業務の整理)
- ・職員の勤務体制の確保(長期化を見据えた勤務の調整)

## 【まとめ】

大規模クラスターが発生したことにより、普段の感染予防対策、感染者が発生した場合の対応方法、BCP作成の意義等様々な教訓を思い知らされることとなった。また、利用者においてコロナ自体は治療薬等の効果もあり、早期に回復することができたが、その後、基礎疾患の悪化やADLの低下、生活意欲の低下があり、急性期病院や療養型病院への転院が相次いだ。そのことによるベッド稼働率の低下は3カ月以上続いた。

ただその一方、多職種協働で困難に立ち向かったことでチームとしての一体感が強まった。新型コロナウイルス等感染症への対応はこれからも続く。痛い経験を決して忘れず糧に変えて、利用者の当たり前前日常が続くよう業務に当たっていきたい。